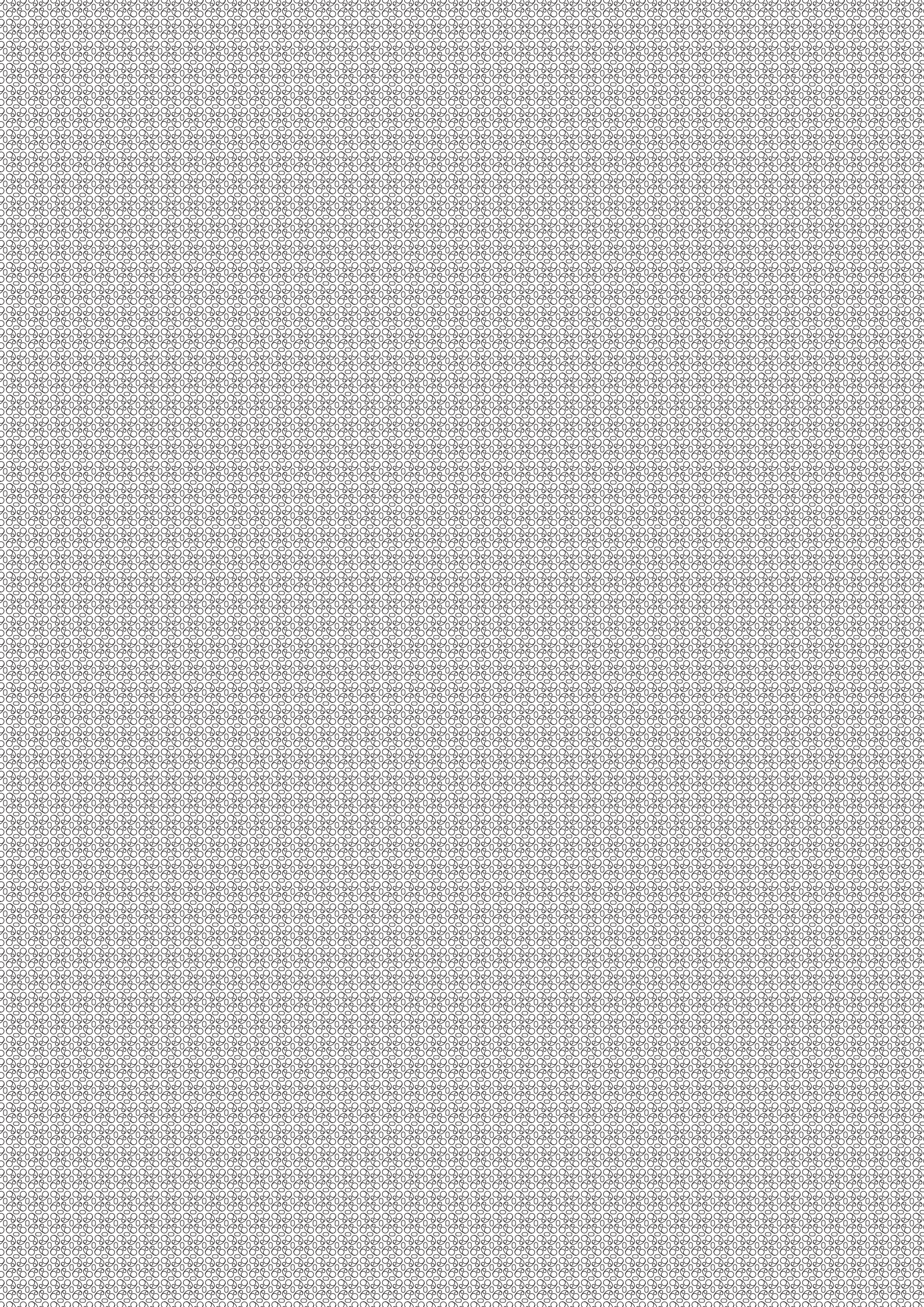


国  
語

注  
意

- 1 問題は **1** から **4** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に HB 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の ア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や** や「**や**」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



## 1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書かいしょで書け。

- (1) 他とは一線を画する作品だ。
- (2) 帰ってきた息子を抱擁する。
- (3) 堅固な意志をもって実行する。
- (4) 額縁に入った西洋の名画を鑑賞する。
- (5) 古代のシヨウゾクを身にまとう。
- (6) 優勝のシユクガ会を開催する。
- (7) かわいいザツカを集める。
- (8) 冬期の特徴的な気候をサンカンシオンという。

## 2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

清澄きよみずみは、刺繡ししゅうが趣味しゅみの高校一年生である。姉の水青みづあおが結婚することになり、清澄はウエディングドレスを作ることを申し出た。しかし思ったようなものは作れず、ドレス自体は縫製ほつせいの会社に勤める父が中心となって作り、清澄はできあがったドレスに刺繡ししゅうをすることになった。ある日、姉の婚約者こんやく者の紺野こんのがドレスのある部屋に入ってきた。

「すごいと思いませんか？」

「うん、すごいな。」

ノースリーブが嫌。かわいすぎるのは嫌。とにかくキラキラしてるのは嫌。

そんなンドレスちゃうわ、と僕ぼくが鼻白はなしろんだ姉の要望を、父と父の職場の人たちは一度も否定しなかっただけでなく、正確にその意図を酌しやくんでこのドレスを縫ぬい上げた。

ワンピースと呼んでも差し支つかえないほどシンプルでカジュアルなデザインと風通しの良いガーゼの素材は、人前に出ることが苦手な姉きんちゆうの緊張をきつとやわらげてくれるだろう。

「でも、仕上げは清澄くんがやるんやろ？」

自分の手でドレスを仕上げられなくて落ちこんでいた僕に、黒田くろださんが「刺繡ししゅうを入れてみては。」というアドバイスをくれた。

黒田さんは父の雇い主やとぬしというか、相棒というか、そんな感じの人だ。

僕にとつてはある意味、父以上に父のような位置づけの人物でもあるのだが、その微妙なニュアンスを紺野さんに説明できる気がしない。すくなくとも今は。

「凶案のことで、まだ悩んでるんです。」

とにかく「無難」を重んじる姉を尊重して、裾のあたりにだけごく控えめに野の花を刺繍しようと思っていた。白い糸で、近くで見るとそれとわかる程度にさりげなく。<sup>(1)</sup>でもなにかが違うような気がして、まだひと針もすすめられずにいる。だって僕がしたい刺繍は、そして姉にふさわしいのは「無難」なんかじゃないはずだから。

「でも、式はもう一週間後やで。」

「そうなんですけど……。」

ドレスはこのままでじゅうぶんすばらしいできばえだ。僕の刺繍で台無しにするようなことがあってはならないと思うと、なおさら手が動かなくなってしまう。

もう時間がない。刺繍を入れるにせよ、入れないにせよ、はやく決めなければならぬのに。

口ごもってしまった僕をちらりと見て、紺野さんが咳払いをひとつした。

「質問してもいい？」

「どうぞ。」

「そもそも、どういうきっかけで刺繍はじめたん？ いや、前から男子の趣味としてはめずらしいんじゃないかなと思ってて。」

あ、おかしいとか言うてるわけではないねんで、とぐいぐい身を乗り

出してくる紺野さんを「わかってます、わかってます。」と押し戻した。刺繍をはじめたきっかけは、祖母がやっていたから。でももちろんそれだけではない。

「刺繍は世界中にあつて、それぞれ違う特徴があるんです。」

紺野さんが「へえ、そうなん。」とふたたび身を乗り出す。

「たとえば日本にはこぎん刺しっていうのがあるんですけど、これってもともと布を丈夫にして暖かくするために糸を重ねたのがはじまりらしくて。」

「ほう。」

「あとね『背守り』って知ってます？ 赤ちゃんの産着の背中に刺繍する習慣があつたんですって。いわゆる魔除けです。鶴とか亀とかね、そういう凶案を。」

「ほう、ほう。」

紺野さんが大きく頷く。<sup>(2)</sup>姉はきつとこの人のこういうところを好きになつたんだろう。自分がものすごくおもしろい話をしているみたいで、悪い気はしない。

日本だけじゃない。ルーミアのある地方では、娘が生まれるとすぐにその子の嫁入り道具のシーツや枕カバーに刺繍をはじめめる。インドには「ミラーワーク」と呼ばれる鏡を縫いこんだ刺繍の技法がある。鏡が悪いものを反射して身を守ってくれる、と考えられているのだ。

「刺繍はずっと昔から世界中にあつて、手法はいろいろ違うのに、そこにこめられた願いはみんな似てるんです。それってなんか、おもしろいでしょ。」

世界中で、誰かが誰かのために祈っている。すこやかであれ、幸せであれ、と。

高校生になってからいろいろな刺繍に関する本を読んだりしているうちに、もつとくわしく刺繍の歴史を知りたいと思うようになった。そこにめられた人々の思いを、暮らしを、もつと知りたいと。

人に話すのはこれがはじめてだった。目標というほどたしかなものではなかった欲求が、言葉にした瞬間に輪郭を得た。そうか僕はそんなふうに考えていたのかと、目を睜る。輪郭をよりくつきりとしたものにしたくて、もう一度口に出した。

「知りたいんです、もつと。」

「すごいなあ。壮大やなあ。」

「いや、壮大って、そんな。」

「壮大な弟ができてうれしいわ。」

そこまで屈託なく喜ばれるとこつちが恥ずかしい。身体の向きを変えて、じわじわ熱くなる頬を見られないようにした。

開け放したままの襖から、母がふいに顔をのぞかせた。僕らの話を聞いていたのだろうか。けつして目を合わせようとせず、ココアがふたつのおったトレイを捧げ持って入ってくる。お湯を注ぐだけのインスタントのやつで、母は以前からそれを「味はそんなでもないけど簡単なのがええ。」と愛飲している。

「ありがとうございます。」

紺野さんが正座した姿勢のまま、頭を下げた。母はドレスには一瞥もくれずに、トレイを紺野さんの脇に置いた。

「清澄くんってすごいですよ。お母さん。」

母はなにか言おうとして、はげしく咳きこむ。風邪をひいたらしく、数日前からずっと咳をしているし、日を追うごとにその咳ははげしさを増している。

でも「だいじょうぶか。」と僕は訊ねないし、母もけつして僕のほうを見ない。涙目のまま、口元を押さえて部屋を出てしまった。

「お母さん、だいじょうぶかな。」

「あの人、風邪でも仕事休まへんから。なんの意地か知らんけど病院にも行かへんし。」

だから治りが遅い。毎年のことだ。だいじょうぶかな、なんて心配する気にもなれないし、それに母のことだから良いタイミングで咳が出てくれたぐらいに思っていそう。紺野さんの「すごいですよ。」に答えずに済むから。

「母は嫌いなんです。僕が刺繍するのが。」

なんでそんなわざわざ悪目立ちするようなことすんの、というのが母の言いぶん。僕が学校でからかわれたり、いじめられたりしないか、ずつとそんな心配ばかりしている。

紺野さんはあいまいな微笑みを浮かべて黙っている。僕と母のどちらの肩を持つても角が立つ、といったところだろうか。

実際、中学生までの僕はいつもひとりだった。母や祖母を心配させないように、高校に入ったら友だちをつくるためにがんばってみようと思つたこともある。でも自分の好きなことを好きではないふりをするのも、好きではないことを好きなふりをするのも、すごくさびしい行為だと気が

づいた。だから僕は刺繍をやめなかったし、無理して周囲に合わせるのもやめた。だけど。

畳の上に投げ出したスマートフォンが点滅している。宮多が「ひまー。」というメッセージを送ってきた。「こっちは忙しい。」と返すと即座にパ  
ンダが泣いているスタンプが表示される。

(5) 僕は刺繍をやめなかった。だけど、友だちは残った。

熱いココアがおいしくて、あらためて季節が変わったことを知る。春が来て、夏が過ぎて、秋になった。冬を待たずに、姉はこの家からいなくなる。

(寺地はるな「水を縫う」による)

〔注〕 鼻白んだ——圧倒されて心がひるんだ。

黒田さん——清澄が幼い頃から世話になっている、父の友人。

宮多——清澄の高校の同級生。

〔問1〕 屈託なく、一瞥もくれずに の意味として最も適切なものを、

それぞれ選べ。

a ア 意図を理解せず b ア 興味をもたないで

イ 何も気にせずに イ 触らないように

ウ 過剰なほどに ウ ちらっとも見ないで

エ 気を遣って エ 見ないふりをして

〔問2〕 (1) でもなにかが違うような気がして、まだひと針もすすめられず

にいる。とあるが、清澄が「ひと針もすすめられずにいる」わけ

として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 姉は本当は刺繍をすることを望んでいない、と気づきながらも自分

から言い出した手前引くことができず、時間が足りないことを言い訳

にして逃避しているから。

イ 手芸の腕前では誰にも負けない、と思っていたが少し自信がゆらぎ、

不完全な刺繍をすることで周囲からも才能がないと思われるかもしれ

ないと心配しているから。

ウ 野の花の刺繍は姉が重んじる「無難」なものではない、と感じなが

らもそのデザインが気に入っており、なんとか姉を説得する方法はな

いかと苦悩しているから。

エ 姉の要望と姉にふさわしいものとは違う、と感じながらも具体的な

案は思いつかず、このままでは自分の刺繍がドレスを損なうかもしれ

ないと葛藤しているから。

〔問3〕<sup>(2)</sup> 姉はきつとこの人のこういうところを好きになつたんだろう。とあるが、清澄から見た紺野の人物像の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 全く興味がないことでも興味があるふりをしてくれ、表面上は楽しく会話を続けてくれる愛想のいい人物。

イ 相手が高校生であつても好奇心を素直に表現し、しっかり向き合つて真剣に話を聞いてくれる誠実な人物。

ウ 質問一つするにも言葉を慎重に選んで発言し、婚約者の家族に対して節度をもつて接する礼儀正しい人物。

エ 口に出さなくても何かに思い悩む様子を敏感に察知し、示唆に富む話をさりげなくしてくれる優しい人物。

〔問4〕<sup>(3)</sup> 輪郭をよりくつきりとしたものにしたくて、もう一度口に出した。とあるが、ここでいう「輪郭をよりくつきりとしたものにする」とはどうすることか。五十字以上六十字以内で説明せよ。なお、お、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

〔問5〕<sup>(4)</sup> でも「だいじょうぶか。」と僕は訊ねないし、母もけつして僕のほうを見ない。とあるが、清澄が「訊ねない」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 母は風邪を悪化させることが多いのであまり心配していないし、ドレス作りを認めてくれないことに清澄は不満を感じているから。

イ 母は意地っ張りであからさまに心配されることを好まないし、口に出さなくても心配する気持ちは伝わると清澄は考えているから。

ウ 母が咳をしているのはいつものことだし、話しかけて引き留めると母と紺野が口論になるかもしれないと清澄は心配しているから。

エ 母が本当はドレスの仕上がりを気にしているのは明らかだし、この場に留まって口出しをされるのは嫌だと清澄は思っているから。

〔問6〕<sup>(5)</sup> 僕は刺繍をやめなかった。だけど、友だちは残った。とあるが、この表現から読み取れる清澄の様子に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 友だちができたことで、趣味について共に語りあうことの楽しさを知り、より会話を弾ませるため多くの趣味をもとうとしている。

イ 友だちができたことで、自分の刺繍が人を感動させることを知り、より評価されるために技術を磨きたいと願うようになっていく。

ウ 友だちができたことで、自分の好きなことを偽る必要はないと考えられるようになり、自分に自信をもてるようになっていく。

エ 友だちができたことで、無理して周囲に合わせるのはすごくさびしい行為だと気づき、ひとりでも刺繍を続けようとして決意している。

〔問7〕 本文の内容や表現について説明したものととして最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 方言で話す紺野に対して清澄は常に敬語を用いており、新しい家族との関係に戸惑う清澄の様子が象徴的に表現されている。

イ 文の中断が多用されており、お互いを思いやるあまり本音を伝え合うことができな家族の状況が比喩的に表現されている。

ウ 刺繍の専門的な話が挿入されており、周囲との関係を遮断して趣味に打ち込もうという清澄の決意が明確に描写されている。

エ 清澄の一人称で回想を交えながら描かれており、揺れ動きながらも自分自身を見つめる清澄の心情が詳細に描写されている。



次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。 )

科学コミュニケーションの本来の目的のひとつは、世の中を一つのチームにすることだと、私は考えています。ですから、世の中を「科学の側」と「そうでない側」にセクター分けするのは本意ではありません。ですが、現状や実態を整理して把握するために、あえて単純化することにします。

まず「科学の側」です。これを、科学の学術的な知識を生産するグループだと考えることにしましょう。いわゆる科学者たちのことです。しかしながら、これと一枚岩ではありません。専門が細かく分かれてしまった現代では、ある分野の専門家も、他の分野においては、一般市民と変わることのない非専門家に過ぎないこともあるからです。

一方の「そうでない側」にはどんな人たちがいるでしょうか。こちらには、「一般市民」「産業界」「政治家・行政官」などがあります。かなり乱暴な分類かもしれませんが、これらは、人が何かの価値判断をする時に、「無意識に帰属してしまっている価値観のグループ」程度の意味に考えてください。属するセクターは時々刻々変わっていきます。仕事場と家では違うセクターにいることもあります。

これらのセクターは、それぞれ独自の論理と価値観を持っています。「科学の側」の興味は、自然に関する真理を探究することです。「一般市民」の関心は、生命・環境・幸福・平和などですが、これらは安全や安心に関わることであり、不安心理と密接に関係しています。「産業界」

は、自らが属する産業分野を育むと同時に、四半期決算で収支を問われる厳しい世界に生きる上で役立つ何かを必要としています。「政治家・行政官」は、配分した予算に対する効果、社会還元、国際的立場に強い関心を持っています。

今、どのセクターとコミュニケーションしようとしているのかということに意識的でないと、コミュニケーションが食い違ったものになることがあります。すなわち、受け手の分析が不十分な場合です。たとえば、新しい科学技術が生まれた時、一般市民はその危険性や悪用を気にしているにもかかわらず、科学者たちはその技術によって生みだされる恩恵の話ばかりすることがあります。科学者はこの時、無意識のうちに、行政官に対するコミュニケーションをしまっているのです。

まず、ここでひとつ大切なことを確認しておきたいと思います。それは、科学そのものに価値があらかじめ存在しているわけではない、ということ。科学は客観的で普遍的なものです。したがって、科学には人類普遍的な絶対的価値がある、と「科学の側」は信じ切っていることが多いのです。しかし、価値とは、その言葉の意味からして主観に過ぎません。科学はうまくいく道具かもしれませんが、それと価値とは話が別なのです。科学の価値は、一般市民とともに、人類が合意して作り上げていくものです。

「科学の側」と「一般市民」の間のコミュニケーションで、まず一番大切なのは、受け手の徹底的な分析ということになります。さて、どちらが受け手なのでしょうか。それは両方です。科学コミュニケーションにおいては、「科学の側」も「一般市民」も、どちらも送り手であり、

同時に、受け手でもあるのです。

ですから、科学コミュニケーションを考えようとするなら、「人間とはどのようなものなのか」「科学とはどのようなものなのか」という二つの問いに挑み、「一般市民」と「科学の側」を徹底的に分析しなければいけない、ということになります。

一般市民と科学との関わり方についてですが、これは国によって若干のニュアンスの違いがあるようです。米国の民営科学博物館・エクスプロラトリアムの副館長、ロバート・センバーによると、科学コミュニケーションに必要とされる要素として、欧州では「対話」、米国では「理解」、日本では「関心」が挙げられるといいます。これには、歴史的経緯\*が大大きく影響しています。欧州では宗教や人文主義に根ざす反科学的思想があり、米国ではキリスト教根本主義による進化論の否定などの非科学が根強く存在する一方、日本の傾向としては科学そのものへの関心の低さがあります。反科学との「対話」、非科学に対する「教育」、無関心層との「共感」。科学コミュニケーションに必要とされる機能は国や地域によって異なります。

こうした見方は、統計的調査によって実証されたものではありません。その上、どの国にもそれぞれ多様な人々がいます。また、日本人に対して、安易に「無関心」という言葉を使用しましたが、この言い方は少々デリカシーがなさ過ぎます\*。実際には程度とありようが違うだけで、関心がゼロの人などいません。ただ、日本語には「なさ過ぎる」という不思議な表現もあるぐらいなので、「無関心」という言葉は「関心が低い」という程度の意味にとっておいてください。

それでも、日本における科学コミュニケーションを考える時、無関心層といかに共感し、価値観をともにしてゆくかが重要な鍵\*となると考えて、おそらく大きな間違いはないでしょう。<sup>(3)</sup>日本の科学は無関心の海に溺れているのです。

では、そういった無関心層との間に必要なコミュニケーションとは何でしょうか。

すべてのコミュニケーションは「メッセージ」広い意味での情報やりとりしています。広い意味での情報とは、五感を通じて知覚可能な外界からの刺激のすべてを指します。それは言語的な情報だけではありません。声の調子、表情、身振り、その時の日差し、どこからか聞こえる鳥の声、相手の背後に見える大きなケヤキの樹\*など、いろいろあるのです。そういった情報の多くは、意識されることすらないかもしれません。<sup>(4)</sup>ですが、その広い意味での情報をやりとりした結果、伝わるものが何かを考えると、コミュニケーションは大まかに二種類に分けることができます\*と思います。

まず一つめは、コミュニケーションによって伝わるものが、狭い意味での情報の場合です。狭い意味での情報とは、言い換えれば、コンピューターのデータとして扱えるものです。言語はもちろん、映像や音など、何らかの形でデータとして記録に残せるものすべてです。こうした狭い意味での情報を扱うコミュニケーションを「情報伝達のコミュニケーション」と呼ぶことにしましょう。

もう一つは、伝わるものがそれ以外、狭い意味での情報以外の場合です。それは、現在の人類の能力ではデータの形に表すことができないも

のです。感情、倫理、規範、価値観などです。こういったものも、その具体的な内容を言葉で表現することは不可能ではないかもしれませんが。私たちはそれらを何とかして言葉にしようと努力します。しかしながら、いったん言葉にしてしまうと、それらはただちに狭い意味での情報になってしまふのが難しいところなのです。こういったコミュニケーションを「共感・共有のコミュニケーション」と呼ぶことにしましょう。「情報」のコミュニケーション」に対する、「このころのコミュニケーション」だと考えても結構です。共感と共有を分けたことには、それなりの意味があります。共感するのは感情、共有するのは倫理・規範・価値観などです。

(5) ここで誤解のないように、「価値観の共有」という言葉がどのような意味で使われているかをはつきりさせておきたいと思えます。これはけっして、価値観を同じくすることではありません。価値観が伝わる、感じる、わかる、ということなのです。その価値観に同意するかどうかは、また別の問題です。共感についても同様です。たとえば、ドラマの登場人物の気持ちや感じ方が、自分のことのようにわかることを共感といえます。この場合も、必ずしも、その人物の気持ちに同意する必要はないのです。

コミュニケーションを「情報伝達」と「共感・共有」に分けましたが、どんなコミュニケーションもその二つの要素を同時に持っていることが少なくありません。ただ、コミュニケーションによって、どちらに重きを置くかが異なっているのです。

《 中略 》

科学コミュニケーションにおいて、米国のように「教育」をしたいのであれば、情報伝達の機能だけでもコミュニケーションは可能でしょう。最新の科学の知見という「情報」を、わかりやすく伝えることが教育の主たる目的だからです。あるいは、欧州のように「対話」をしようとする場合でも、情報伝達でコミュニケーションは十分に可能でしょう。お互いの意見とその違いという「情報」をしっかりと吟味することから対話は始まるからです。

しかし、日本において必要なのは、無関心層との「共感」であり、価値観の「共有」です。この場合、情報伝達のコミュニケーションだけでは役に立ちません。日本では、科学コミュニケーションに共感・共有の機能が不可欠なのです。

(岸田一隆「科学コミュニケーション」による)

〔注〕 セクター——分野。部門。

四半期決算——企業が三ヶ月に一度決算を行い、開示すること。

エクスポラトリウム——米国のカリフォルニア州にある科学博物館。

人文主義——ギリシャ・ローマの古典研究により普遍的な教養を身につけ、人間の回復をめざした運動、立場。

根本主義——根本となる決まりに忠実であるとする考え方や運動。

デリカシー——感覚や感情のこまやかさ。

〔問1〕<sup>(1)</sup>「科学の側」と「そうでない側」の内容の説明として最も適切

なのは、次のうちではどれか。

ア 「科学の側」とは、科学の学術的な知識を作っている科学者たちのことで、自然に関する真理を探究しているグループ。

イ 「科学の側」とは、科学における分野が細かく分かれている専門家たちのことで、分野を越え協力し合っているグループ。

ウ 「そうでない側」とは、一般市民、産業界、政治家・行政官などのことで、意識的に帰属し価値観を共有しているグループ。

エ 「そうでない側」とは、生命・環境・幸福・平和に関心のある一般市民のことで、日常に安心しきっているグループ。

〔問2〕<sup>(2)</sup>それは、科学そのものに価値があらかじめ存在しているわけではない、ということか。とあるが、どういうことか。次のうち

から最も適切なものを選び。

ア 科学は、科学者の技術により、人類普遍の絶対的価値を生みだすが、行政官とのコミュニケーションが必要になるということ。

イ 科学は、便利な道具かもしれないが、人類普遍の絶対的価値はなく、一般市民と合意して作り上げていくものだということ。

ウ 科学は、客観的で普遍的であり、絶対的価値があると科学者は信じているが、一般市民は初めから合意していないということ。

エ 科学は、科学者が新しい技術による恩恵を受けても、一般市民には関係はなく、人類普遍の絶対的価値がないものだということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup>日本の科学は無関心の海に溺<sup>シ</sup>れているのです。とあるが、どう

いうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 日本の科学は関心が低い人たちの層に迎合せず独自に専門性を高めているということ。

イ 日本の科学は関心が低い人たちの層を巻き込み発展しているということ。

ウ 日本は科学に関心が低い人たちの層に大半を占められてしまっているということ。

エ 日本は科学に関心が低い人たちの層を利用して産業を育てているということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup>ですが、その広い意味での情報をやりとりした結果、伝わるもの

の何が考えられると、コミュニケーションは大まかに二種類に分けることができます。とあるが、ここで言う「二種類に

分ける」とはどういうことか。七十字以上八十字以内で説明せよ。なお、や。や」などもそれぞれ一字と数えよ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> ここで誤解のないように、「価値観の共有」という言葉がどの

ような意味で使われているかをはっきりさせておきたいと思いません。とあるが、「価値観の共有」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 相手の気持ちや感じ方に同意するということ。
- イ 相手と自分の考えに優劣をつけるということ。
- ウ 相手と同調してその人になりきるということ。
- エ 相手の物事への判断基準がわかるということ。

〔問6〕本文中に出てくる「科学コミュニケーション」について、次の

①から⑤はそれぞれA「米国」、B「欧州」、C「日本」のどの国の科学コミュニケーションに当てはまるか。その組み合わせとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ① 価値観の「共有」
- ② 非科学に対する「教育」
- ③ 無関心層との「共感」
- ④ 反科学との「対話」
- ⑤ 科学の知見という「情報」

- ア A ②と⑤ B ④と⑤ C ①と③と⑤
- イ A ②と④ B ③と⑤ C ①と⑤
- ウ A ①と③ B ④と⑤ C ②と⑤
- エ A ②と⑤ B ①と⑤ C ③と④と⑤

〔問7〕本文の内容と構成について説明したもののうち、最も適切なのは、次のうちではどれか。

は、次のうちではどれか。

- ア 日本における「科学コミュニケーション」について、「科学の側」と「そうでない側」の意見を挙げ、「一般市民」側からのコミュニケーション方法について言及し、日本の特殊性とくしゅせいを述べている。
- イ 日本における「科学コミュニケーション」について、「科学の側」と「そうでない側」の定義を示し、「一般市民」とのコミュニケーション方法について言及し、世界と日本との同一性を述べている。
- ウ 日本における「科学コミュニケーション」について、「科学の側」と「そうでない側」の対比をし、「一般市民」側からのコミュニケーション方法について言及し、「情報」のあり方を述べている。
- エ 日本における「科学コミュニケーション」について、「科学の側」と「そうでない側」の例を示し、「一般市民」とのコミュニケーション方法について言及し、「共感・共有」の必要性を述べている。

次のAは、「花」に関する文章であり、Bは本文中で引用されている「源氏物語」胡蝶巻の原文である。□で囲った文章はBの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

滝廉太郎作曲の「花」ができたのは明治三十三年のことでした。作詞は、大学教授で歌人の武島羽衣が担当しています。もともとは春の「花」、夏の「納涼」、秋の「月」、冬の「雪」の四部作であり、組歌『四季』の第一曲として作られたものです。ただし「花」だけ単独で歌われることが多いようです。その一番の歌詞は、

春のうららの隅田川　　のぼりくだりの舟人が  
 權のしづくも花と散る　　ながめを何にたとふべき

となっています。のどかな隅田川の春の光景が、七五調で見事に描写されていますね。「うらら」は「うららか」です。間違いやすいのは「舟人が」の「が」です。これは主語ではありません。「舟人の（手にしている）權」と続きます。また末尾の「べき」は、上の「何に」と呼応して、反語の意味（何にも喻えられない）を表しています。「か・や」の省略とするとわかりやすいかもしれません。明治といいながら、文体は古文そのものですね。

実はこの歌詞には、どうやら『源氏物語』胡蝶巻が下敷きになってい

るようです。胡蝶巻というのは、光源氏が築いた六条院の春の御殿が舞台となっています。その女主人である紫の上が龍頭鶴首の船を池に浮かべて船樂を催し、そこに秋好中宮付きの女房を招待し、春のすばらしさをこれでもかと思せつける趣向になっています。

見物にやってきた女房たちはただもううつとりとして、本来はライブであるはずの春の御殿を讃える和歌を詠じてしまいます（これは秋の敗北を意味します）。その最後の歌こそが、

\* 春の日のうららにさしていく船は棹のしづくも花ぞ散りける

でした。一見ただけで、「花」の一番の歌詞と類似していることがわかりますね。これについては既に『源氏物語』の研究者として名高い玉上琢彌氏が胡蝶巻の解説の中で、

滝廉太郎の作曲で今も歌われる「花」の作詞は武島羽衣だが「春のうららの隅田川、上り下りの舟人が、かいのしづくも花と散る、ながめを何にたとふべき」は、この歌によったのである。

（『源氏物語評釈五』一二三四頁）

と指摘しています。「うらら」は珍しい表現ですが、胡蝶巻と一致していることから、むしろ『源氏物語』を踏まえていることの証拠になりそうです。

唯一、「棹のしづく」が「權のしづく」に変わっています。「權」の

方が、「花のように散るしずく」がたくさん散るはずです。でも『源氏物語』では、「さす」に「日が射す」と「棹指す」が掛けられているので、どうしても技法的に「棹」でなければなりません。あるいは「のぼりくだりの舟」そのものが、「櫂」を用いる西洋的なボートをイメージしているのかもしれませんが。もしこれがボートレースの光景だとすると、<sup>(5)</sup>従来想像されていた古風なイメージは幻想だったことになります。さうていかげでしょうか。

ついでながら一番だけでなく、二番の歌詞にある「桜」・「青柳」も胡蝶巻に出ています。「あけぼの」に近い「朝ぼらけ」、「夕ぐれ」に近い「暮れ」もあります。また三番の「錦」も同様です。これだけ用語が一致・類似しているのですから、武島羽衣は『源氏物語』胡蝶巻の描写を踏まえて「花」の作詞に応用したとって間違いなさそうです。<sup>(6)</sup>さしてみなさんはピンとききましたか。こんなところでも古典の教養が試されているようで恐いですね。

(吉海直人「古典歳時記」による)

〔注〕 龍頭錦首の船——平安時代、貴人が池などに浮かべ、遊宴などに用いた船。

船楽——船上で音楽を演奏すること。また、その音楽。

春の日のうららにさしていく船は棹のしづくも花ぞ散りける

——春の日のうららかななかをのどやかに棹さしてゆく船は、棹からしたたるしずくも花のように散ることでした。

## B

中島の入江の岩陰にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。他所には盛りすぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。

船を中島の入江の岩陰に漕ぎ寄せてあたりを見ると、さりげない立石の風情もまるで絵に描いてあるかのようなのである。あちらこちらにどこも霞んでいる木の枝々も錦を一面に張りわたしたようであるが、お庭前のほうは遠くまでずっと見やることができ、緑が増した柳が枝を垂れ、花もなんともいえない匂いをただよわせている。よそでは盛りが過ぎた桜も、ここでは今を盛りに笑顔を見せ、廊を取りまいて藤の紫も色濃く次々と咲きはじめている。それにもまして、池の水に影を映している山吹は、岸からこぼれるほどまっさかりである。

〔源氏物語〕胡蝶巻 「日本古典文学全集」による

〔問1〕<sup>(1)</sup> 七五調 とは古典によく見られる言葉のリズムである。同じ

く七五調になっているものは、次のうちではどれか。

ア いまは昔竹取のおきなといふ者ありけり

イ ゆく河の流れは絶えずしてしかもとの水にあらず

ウ 春はあけぼのやうやう白くなりゆく山際<sup>やまぎは</sup>

エ ほたるの光まどの雪ふみ読む月日重ねつつ

〔問2〕<sup>(2)</sup> ながら とあるが、これと同じ意味・用法のものを、次の各

文の——を付けた「ながら」のうちから選べ。

ア 好きな音楽を聞きながら試験勉強をする。

イ 旅行先で昔ながらの町並みを歩く。

ウ 子どもでありながらしっかりと知っている。

エ 苦しかった体験を涙<sup>なみだ</sup>ながらに語る。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 春のすばらしさをこれでもかと思せつける趣向<sup>しゆこう</sup>になっているま

す。とあるが、「春のすばらしさ」を視覚以外で表現している部

分を、Bの古文の中から十五字で抜き出せ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 「さす」に「日が射す」と「棹指す」が掛けられていると

あるが、これと同じように、一つの言葉に二つの意味が掛けられ

ている語を含む表現があるものは、次のうちではどれか。

ア 秋の野に人まつ虫の声すなり

イ 秋深き隣はなにをする人ぞ

ウ ふるさとは遠きにありて思ふもの

エ 大海の磯<sup>いそ</sup>もとどろによする波

〔問5〕<sup>(5)</sup> 従来想像されていた古風なイメージ とあるが、「古風なイメージ」を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 隅田川の激しい流れによって、少しでも早く人や荷物を運んでしま

おうとするあわただしい様子。

イ 春の隅田川の穏やかな流れの中を、人々や荷物をのせた船がゆつたり

と行き交うのんびりした様子。

ウ 忙<sup>いそが</sup>しそうに往来する人や船と、いつの時代も変わらずに悠然と流れる隅田川を眺望している様子。

エ 昔から絶えることなく続く人々の生き方と、四季それぞれに美しい

隅田川の情景を賛美する様子。



〔問6〕<sup>(6)</sup> みなさんはピンとききましたか。とあるが、これはどのような

ことを言っているのか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「源氏物語」胡蝶巻では「棹」とある表現が、「花」では「權」となつたことを変だと思わないかということ。

イ 「源氏物語」胡蝶巻が影響を与えたのは、「花」の歌詞の一番だけだと考えることに異論はないかということ。

ウ 教養として古典の「源氏物語」胡蝶巻がとても大事だということが、いささかでも理解できたかということ。

エ 「源氏物語」胡蝶巻から思い浮かんだ着想が、「花」の歌詞に応用されているとすぐにわかったかということ。